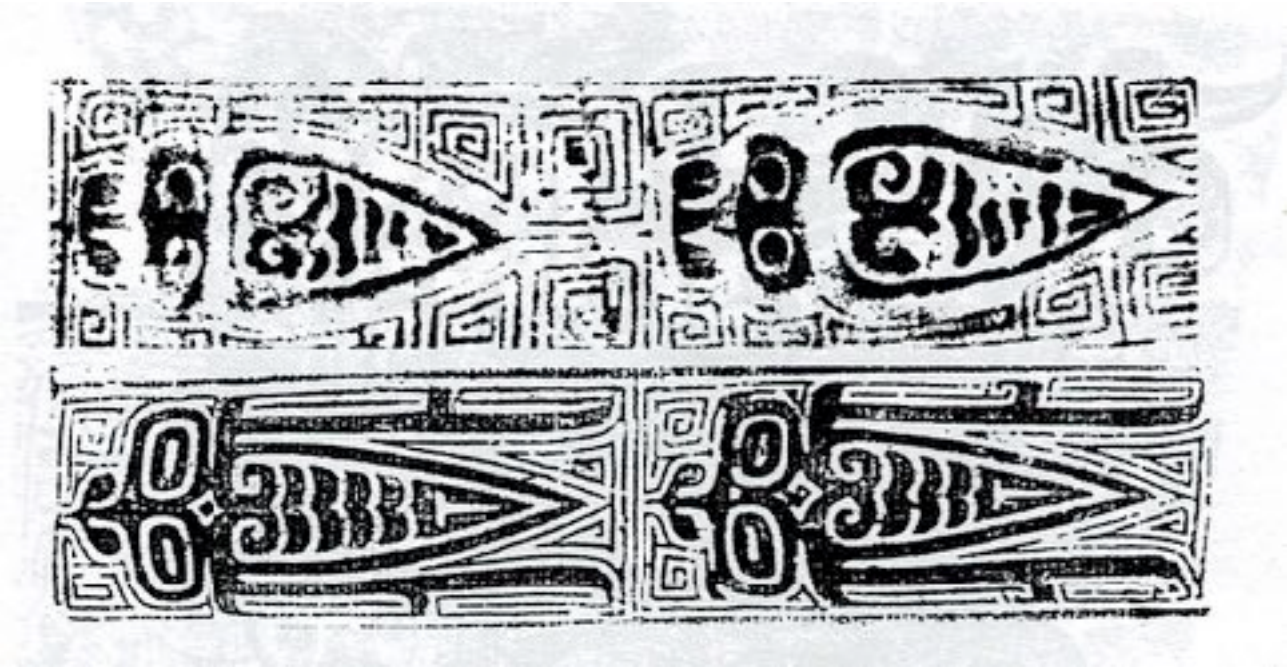
蔀戸の蝉

夏も終わりに近づいて、蝉の声が騒がしいクマゼミから優雅なツクツクボウシに代わってきた。つくつく法師は坊さんだ。寺の蝉と言えば、建物の蔀戸のかんぬき（閂）の取っ手に蝉が着いている。清水寺本堂、知恩院御影堂、大覚寺宸殿、仁和寺宸殿などの蔀戸には着いている。しかし蝉は意匠的には美しいとは言えない。蝉は生まれてから死ぬまでの間に木の根や幹の汁を吸って殺生をしない「不殺生」生き物で、仏教の世界では大切にされてきたとの説明をweb上で見る。植物を専ら食べて他の昆虫を食べない昆虫は多々ある。綺麗な蝶はそうだ。朽ち木や直物を食べる不殺生のクワガタ虫やカミキリ虫は意匠としては蝉なんかよりずっとかっこいい。他に、蝉は飛ぶときにオシッコをするので防火の意味があるとか、飛ぶときにチッと声を出すので防犯の意味があるとの記述も広く出回っているようだ。蝉のオシッコは目薬ほどで、飛ぶときに出す声も聞き取れないほど小さい。不殺生も、防火も、防犯も飾りに蝉を使う理由としては怪しい。

　中国では、蝉は古くから復活のシンボルであった。先史時代の墓からは、死者の口に含ませる蝉型の玉器が多く出土する。地中から羽化する姿から、死者の復活のシンボルとされた（宮崎2018）。蝉は大型の昆虫で鳴き声も大きく目に付く。夏の終わりには全て死に絶え路上に多くの死骸を晒す（他の昆虫の死骸を見ることは希だ）。死に絶えて土に戻った蝉が、翌年また土の中からおびただしい数現れる。人々はそれを生命の再生と見たはずだ。蔀戸のかんぬきの飾りとして蝉を用いたのは、生命の再生の象徴として用いたのではないか。これは、生物学的に納得がいく。

大覚寺宸殿の蔀戸の閂の蝉飾り



中国の商周時代（紀元前2000-1000年）の青銅器の蝉文様　（泉屋博古館）

参考
宮崎法子（2018）花鳥・山水画を読み解く ― 中国絵画の意味　筑摩書房
泉屋博古館（2022）商周青銅器の文様

Ornamental cicadas on the bolt of traditional latticed shutter in Buddhist temples
Cicada was the symbol of revival of life in China. All cicadas die out in autumn. Cicadas emerge again from the ground in the next spring or summer. People might think that cicadas revived. We Buddhists wish to revive in the Buddhist Paradise after we died.